DIALOG(R)File 352:Derwent WPI

(c) 2004 Thomson Derwent. All rts. reserv.

013111227 **Image available**
WPI Acc No: 2000-283098/200024

XRAM Acc No: C00-085379 XRPX Acc No: N00-213091

Organic electroluminescence device comprising a pair of electrodes and an organic luminescent layer sandwiched between the electrodes, for use as material for organic EL devices.

Patent Assignee: IDEMITSU KOSAN CO LTD (IDEK)

Inventor: HOSOKAWA C; KAWAMURA H

Number of Countries: 023 Number of Patents: 007

Patent Family:

Patent No Kind Date Applicat No Kind Date Week WO 200014174 **A**1 20000316 WO 99JP4794 Α 19990903 200024 B EP 1029909 20000823 EP 99940653 19990903 200041 A1 Α 19990903 WO 99JP4794 Α JP 2000309566 A 20001107 JP 99256280 19990909 200061 Α CN 1277626 20001220 CN 99801522 19990903 200121 Α Α KR 2001031112 A 20010416 KR 2000704003 20000414 200163 Α US 6541129 **B1** 20030401 WO 99JP4794 Α 19990903 200324 US 2000530597 20000509 Α US 20030143430 A1 20030731 WO 99JP4794 19990903 200354 Α US 2000530597 Α 20000509 US 2002331645 20021231 Α

Priority Applications (No Type Date): JP 9947110 A 19990224; JP 98255563 A 19980909

Patent Details:

Patent No Kind Lan Pg Main IPC Filing Notes

WO 200014174 A1 J 124 C09K-011/06

Designated States (National): CN KR US

Designated States (Regional): AT BE CH CY DE DK ES FI FR GB GR IE IT LU

MC NL PT SE

EP 1029909 A1 E Based on patent WO 200014174

Designated States (Regional): AT BE CH CY DE DK ES FI FR GB GR IE IT LI

LU MC NL PT SE

JP 2000309566 A 55 C07C-211/58 CN 1277626 A C09K-011/06 KR 2001031112 A C09K-011/06

US 6541129 B1 H05B-033/14 Based on patent WO 200014174 US 20030143430 A1 H05B-033/14 Div ex application WO 99JP4794

Div ex application US 2000530597

Div ex patent US 6541129

Abstract (Basic): WO 200014174 A1

NOVELTY - An organic electroluminescence device comprises a pair of electrodes and an organic luminescent layer sandwiched between the

electrodes.

DETAILED DESCRIPTION - An organic electroluminescence device comprises a pair of electrodes and an organic luminescent layer sandwiched between the electrodes. The positive hole-transport region furnished between the electrodes contains phenylene diamine derivatives represented by general formula (I), (II) or (II)', which have a hole-mobility of 10 -4 cm2/V.s or more when used as the material of a layer or region.

Ar1 - Ar12=H, 1-6C alkyl or alkoxy group, 6-24C aryl group with or without styryl group substitution;

X, Y=single bonds, 6-24C arylene, 1-6C alkylene, diphenylmethylene, ether bonds, thioether bonds, vinyl bonds or aromatic hetero-rings;

R1 - R6=1-6C alkyl, alkoxy group or H and can form a saturated five or six membered ring

USE - The device and derivative are used as a material of a layer or region of organic electroluminescent devices.

ADVANTAGE - The device has a low driving voltage and a long life. The material has a small ionization potential and provides a large hole mobility when used as a layer or region of organic EL devices.

pp; 124 DwgNo 0/1

Title Terms: ORGANIC; ELECTROLUMINESCENT; DEVICE; COMPRISE; PAIR; ELECTRODE

; ORGANIC; LUMINESCENT; LAYER; SANDWICH; ELECTRODE; MATERIAL; ORGANIC;

ELECTROLUMINESCENT; DEVICE

Derwent Class: E14; L03; U11; U14; X26

International Patent Class (Main): C07C-211/58; C09K-011/06; H05B-033/14

International Patent Class (Additional): C07C-211/54; C07C-217/92;

C07D-207/335; C07D-209/44; C07D-213/38; C07D-239/26; C07D-241/12; C07D-249/08; C07D-271/10; C07D-307/52; C07D-333/20; C07D-335/12;

H05B-033/22

File Segment: CPI; EPI

DIALOG(R)File 347:JAPIO (c) 2004 JPO & JAPIO. All rts. reserv.

Image available 06723728

ORGANIC ELECTROLUMINESCENT ELEMENT AND PHENYLENE DIAMINE **DERIVATIVE**

PUB. NO.:

2000-309566 [JP 2000309566 A]

PUBLISHED:

November 07, 2000 (20001107)

INVENTOR(s): KAWAMURA HISAYUKI

HOSOKAWA CHISHIO

APPLICANT(s): IDEMITSU KOSAN CO LTD

APPL. NO.:

11-256280 [JP 99256280]

FILED:

September 09, 1999 (19990909)

PRIORITY:

10-255563 [JP 98255563], JP (Japan), September 09, 1998

(19980909)

11-047110 [JP 9947110], JP (Japan), February 24, 1999

(19990224)

INTL CLASS:

C07C-211/58; C07C-211/54; C07C-217/92; C09K-011/06;

H05B-033/14

ABSTRACT

PROBLEM TO BE SOLVED: To obtain the subject element having long life and capable of reducing the driving voltage of an organic EL element by providing a pair of electrodes and an organic luminescent layer containing electric charge injecting auxiliary and adding phenylenediamine derivative to a hole transporting zone between the above electrodes.

SOLUTION: This element has a pair of electrodes and an organic layer sandwiched between these electrodes and containing a charge injection auxiliary and contains a phenylenediamine derivative represented by formula I (Ar1 to Ar6 are each H, a 1-6C alkyl or the like; X is a single bond, a 6-24C arylene or the like; R1 and R2 are each a 1-6C alkyl, alkoxy or H), formula II (Ar7 to Ar12 are same as Ar1 to Ar6; Y is same as X; R4 and R5 are same as R1 and R2) or formula III (R5 and R6 are same as R1 and R2) and 10-4 cm2/V.s hole mobility on using as a layer or a zone in a hole transporting zone provided between the above electrodes. The content of the phenylenediamine derivative is preferably 30-100 mol.%.

COPYRIGHT: (C)2000,JPO

(19)日本国特許庁(JP)

(12)公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号 特開2000—309566

(P2000-309566A) (43)公開日 平成12年11月7日(2000.11.7)

(51) Int. Cl. 7	識別記号	F I	テーマコード(参考)
C07C211/58		C07C211/58	3K007
211/54		211/54	4H006
217/92		217/92	
C09K 11/06	620	C09K 11/06 620	
H05B 33/14		H05B 33/14 A	
		審査請求 未請求 請求項の数7	OL (全55頁)
(21)出願番号	特願平11-256280	(71)出願人 000183646	
		出光興産株式会社	
(22)出願日	平成11年9月9日(1999.9.9)	東京都千代田区丸の内は	3丁目1番1号
		(72)発明者 川村 久幸	
(31)優先権主張番号	特願平10-255563	千葉県袖ケ浦市上泉1280番地	
(32)優先日	平成10年9月9日(1998.9.9)	(72)発明者 細川 地潮	
(33)優先権主張国	日本(JP)	千葉県袖ケ浦市上泉1280番地	
(31)優先権主張番号	特願平11-47110	(74)代理人 100079083	
(32)優先日	平成11年2月24日(1999.2.24)	弁理士 木下 實三	(外1名)
(33)優先権主張国	日本 (JP)	Fターム(参考) 3K007 AB06 AB11 C	A01 CB01 DA01

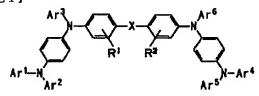
(54) 【発明の名称】有機エレクトロルミネッセンス素子およびフェニレンジアミン誘導体

(57)【要約】

【課題】 有機EL素子の駆動電圧を低減できるとともに、駆動時間の長い有機EL素子を提供する。イオン化ポテンシャルが小さくかつ正孔移動度が大きい材料を提供する。

【解決手段】 一般式(I)

【化1】



一般式(I)

(式中、 $Ar'\sim Ar'$ 、R'、R'は、明細書に記載したとおりである。) で表され、層または域として用いたと

きの正孔移動度が10-'cm'/V・s以上のフェニレンジアミン誘導体を用いて有機発光層内の正孔輸送層を構成し、有機発光層に電荷注入補助材を添加する。

DB03 EB00

BU46 BU48

4H006 AA01 AB92 BJ50 BP30 BP60

【特許請求の範囲】

【請求項1】 一対の電極と、これらの電極間に挟持された有機発光層とを備えた有機エレクトロルミネッセンス素子であって、

1

前記電極間に設けられた正孔輸送帯域は、下記の一般式 (I)、一般式(II)または一般式(II)′で表される フェニレンジアミン誘導体を含有し、

このフェニレンジアミン誘導体は、層または域として用いたときの正孔F移動度が 10^{-1} c m^2/V ・s 以上であるとともに、前記有機発光層は電荷注入補助材を含有 10 することを特徴とする有機エレクトロルミネッセンス素子。

(化1)

$$Ar^{2} \stackrel{Ar^{2}}{\longrightarrow} R^{1} \stackrel{R^{2}}{\longrightarrow} N^{Ar^{6}}$$

$$Ar^{2} \stackrel{Ar^{2}}{\longrightarrow} N - Ar^{4}$$

一般式(I)

 $\{Ar'\sim Ar'$ は、水素原子、炭素数 $1\sim 6$ のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数 $6\sim 2$ 4のアリール基、もしくはスチリル基によって置換されていてもよい核炭素数 $6\sim 2$ 4のアリール基である。Xは連結基であり、単結合、核炭素数 $6\sim 2$ 4のアリーレン、炭素数 $1\sim 6$ のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結合、チオエーテル結合、置換もしくは無置換のビニル結合または芳香族へテロ環である。R'、R'は、炭素数 $1\sim 6$ のアルキル基、もしくはアルコキシ基、または水素原子であって、互いに結合して置換もしくは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。 $\}$

【化2】

一般式 (II)

 ${A r' \sim A r''}$ は、水素原子、炭素数 $1 \sim 6$ のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数 $6 \sim 2$ 4 のアリール基、もしくはスチリル基によって置換されていてもよい 50

核炭素数6~24のアリール基である。Yは連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族へテロ環、または置換もしくは無置換のビニル結合である。R³、R¹は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ基、または水素原子であって、互いに結合して置換もしくは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。〕

[化3]

一般式(Ⅱ)'

【A r'~A r''は、水素原子、炭素数1~6のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数6~24のアリール基、もしくはスチリル基によって置換されていてもよい核炭素数6~24のアリール基である。Yは連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族へテロ環、または置換もしくは無置換のビニル結合である。R'、R'は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ基、または水30素原子であって、互いに結合して置換もしくは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。〕

【請求項2】 請求項1に記載した有機エレクトロルミネッセンス素子において、

前記正孔輸送帯域は、前記一般式(I)、一般式(II) または一般式(II) で表されるフェニレンジアミン誘 導体を含有する正孔注入層を有して構成されていること を特徴とする有機エレクトロルミネッセンス素子。

【請求項3】 請求項1に記載した有機エレクトロルミネッセンス素子において、

40 前記正孔輸送帯域は、前記一般式(I)、一般式(II) または一般式(II) で表されるフェニレンジアミン誘 導体を含有する正孔輸送層を有して構成されていること を特徴とする有機エレクトロルミネッセンス素子。

【請求項4】 請求項1から請求項3までのいずれかに 記載した有機エレクトロルミネッセンス素子において、 前記一般式(I) 中の $Ar'\sim Ar'$ 、(II) 中の $Ar'\sim Ar''$ 、(II) ' 中の $Ar'\sim Ar''$ のうち、少なくと もひとつが核炭素数 $10\sim24$ の縮合芳香族環であることを特徴とする有機エレクトロルミネッセンス素子。

【請求項5】 一般式(III)

3

一般式(III)

[A r¹³~A r¹⁸は、水素原子、炭素数 1~6のアルキ ル基またはアルコキシ基、核炭素数6~24のアリール 基、もしくはスチリル基によって置換されていてもよい 炭素数6~24のアリール基である。Xは連結基であ り、単結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素数1 ~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結 合、チオエーテル結合、置換もしくは無置換のビニル結 合、芳香族ヘテロ環である。また、R'、R'は、炭素数 1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ基、または水 素原子であって、互いに結合して置換もしくは無置換の 五員環または六員環を形成してもよい。但し、A r13~ Ar¹⁸、Xの少なくとも1つは、スチリル基含有のアリ ール基であるか、または、Ar'、Ar'8および下記化 学式5で示される基本骨格のいずれかが縮合芳香族環、 芳香族へテロ環、または置換もしくは無置換のビニル結 合を含む。〕で表されるフェニレンジアミン誘導体。 【化5】

【請求項6】 一般式 (IV) [化6]

一般式(IV)

[Ar''へAr''は、水素原子、炭素数1~6のアルキ ル基またはアルコキシ基、核炭素数6~24のアリール 基、もしくは、スチリル基によって置換されていてもよ い核炭素数6~24のアリール基である。Yは連結基で あり、単結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素数 1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結 50 合、チオエーテル結合、芳香族ヘテロ環、または置換も しくは無置換のビニル結合である。また、R¹、R 10は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ 基、または水素原子であって、互いに結合して置換もし くは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。但 し、Ar' ¹ ~ Ar² ¹、Yのうち少なくとも1つは、スチ リル基含有のアリール基であるか、または、下記化学式 7で示される基本骨格のいずれかが縮合芳香族環、芳香 族ヘテロ環、置換または無置換のビニル結合を含む。〕 【化7】

または、一般式 (V)

【化8】

一般式 (V)

「Ar¹¹ ~ Ar¹⁰は、水素原子、炭素数1~6のアルキ ル基、またはアルコキシ基、核炭素数6~24のアリー ル基、もしくは、スチリル基によって置換されていても よい核炭素数6~24のアリール基である。Yは連結基 であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素 数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル 結合、チオエーテル結合、芳香族ヘテロ環、置換もしく は無置換のビニル結合である。また、R''、R''は、炭 素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ基、また は水素原子であって、互いに結合して置換もしくは無置 40 換の五員環または六員環を形成してもよい。〕で表され るフェニレンジアミン誘導体。

【請求項7】 一対の電極と、これらの電極間に挟持さ れた有機発光層とを備えた有機エレクトロルミネッセン ス素子であって、

前記電極間に設けられた正孔輸送帯域は、下記の一般式 (III)、一般式(IV)または一般式(V)で表されるフ ェニレンジアミン誘導体を含有することを特徴とする有 機エレクトロルミネッセンス素子。

(化91

一般式(III)

[Ar¹³~Ar¹⁸は、水素原子、炭素数1~6のアルキ 10 ル基またはアルコキシ基、核炭素数6~24のアリール 基、もしくはスチリル基によって置換されていてもよい 炭素数6~24のアリール基である。Xは連結基であ り、単結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素数1 ~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結 合、チオエーテル結合、置換または無置換のビニル結 合、芳香族ヘテロ環である。また、R'、R'は、炭素数 1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ基、または水 素原子であって、互いに結合して置換もしくは無置換の 五員環または六員環を形成してもよい。但し、A r'3~ Ar¹⁸、Xの少なくとも1つは、スチリル基含有のアリ ール基であるか、または、Arい、Arいおよび上記化 学式5で示される基本骨格のいずれかが縮合芳香族環、 芳香族へテロ環、または置換もしくは無置換のビニル結 合を含む。〕

【化10】

一般式(IV)

【Ar''へAr''は、水素原子、炭素数1~6のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数6~24のアリール基、もしくは、スチリル基によって置換されていてもよい核炭素数6~24のアリール基である。Yは連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族へテロ環、または置換もしくは無置換のビニル結合である。また、R'、R''は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ基、または水素原子であって、互いに結合して置換もし

くは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。但し、A r¹⁹~A r²⁴、Yのうち少なくとも1つは、スチリル基含有のアリール基であるか、または、上記化学式7で示される基本骨格のいずれかが縮合芳香族環、芳香族へテロ環、置換または無置換のビニル結合を含む。〕

[化 1 1]
Ar²⁵
Ar²⁶
N
N
N
Ar²⁷
Ar²⁸
R¹²
Y
R¹¹

一般式(V)

「A r ¹⁵ ~ A r ³⁰ は、水素原子、炭素数 1 ~ 6 のアルキル基、またはアルコキシ基、核炭素数 6 ~ 2 4 のアリー 20 ル基、もしくは、スチリル基によって置換されていてもよい核炭素数 6 ~ 2 4 のアリール基である。 Y は連結基であり、単結合、核炭素数 6 ~ 2 4 のアリーレン、炭素数 1 ~ 6 のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族へテロ環、置換もしくは無置換のビニル結合である。また、R''、R''は、炭素数 1 ~ 6 のアルキル基、もしくはアルコキシ基、または水素原子であって、互いに結合して置換もしくは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。}

【発明の詳細な説明】

0 [0001]

【発明の属する技術分野】本発明は、有機エレクトロルミネッセンス素子(以下、有機EL素子)およびフェニレンジアミン誘導体に関し、詳しくは、一対の電極とこれらの電極間に挟持された有機発光層とを備えた有機EL素子、および、有機EL素子等の材料として用いられるフェニレンジアミン誘導体に関する。

[0002]

【背景技術】有機EL素子は完全固体素子であり、軽量・薄型、低電圧駆動のディスプレイや照明を作製するこ40 とができる為に、現在盛んに研究が行われている。この有機EL素子をディスプレイに応用する時の課題として、駆動電圧の低電圧化がある。例えば、特開平4-308688号公報に開示されているような芳香族アミンのデンドリマーを正孔注入材料に用いることにより、駆動電圧の低電圧化が進められている。この化合物はフェニレンジアミン骨格を有するためイオン化ポテンシャルが5.2 e Vと小さく、駆動電圧を低減する効果があった。

[0003]

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、フェニ

レンジアミン骨格を有する化合物は、正孔移動度が3× 10 - 'cm'/V・s以下と小さく、そのため高電流注 入域での駆動電圧の低減はまだ不十分であった。また、 特開平9-301934号公報に開示の高分子量芳香族 アミン化合物もイオン化ポテンシャルは5.2eVと小 さいが、正孔移動度が十分でないという問題があった。 これは、不純物が混入して正孔移動度が低下しているた めであると予想される。すなわち、特開平9-3019 3 4 号公報に記載された化合物の蛍光スペクトル(図 1) では、本来あるはずのない500 n m以上の最大蛍 10 光波長を有する発光成分が観測されている。このこと は、不純物が混入していることを示している。また、わ ずか76時間の駆動で2.7Vもの電圧上昇が生じてお り、低電圧化の障害となっていた。このため、同公報に 開示されている素子は、不純物のため正孔移動度が低下 し、駆動電圧が上昇していると考えられる。さらに、緑 色の蛍光成分を有しているため、青色発光素子の正孔輸 送帯域にこれらの化合物を用いると、緑色の発光成分が 混入して青色発光を得ることができなかった。ところ で、国際特許公報WO98/30071 (1998年7 月9日公開)号公報には、本願発明と類似の化合物を用 いた有機エレクトロルミネッセンス素子が開示されてい るが、電荷注入補助材を含有する発光層と組み合わせた ときに、特に低電圧となる効果は開示されていない。

【0004】本発明の目的は、有機EL素子の駆動電圧 を低減できる寿命の長い有機EL素子を提供することに ある。本発明の他の目的は、イオン化ポテンシャルが小 さく、かつ、層または域として使用した際に正孔移動度 が大きい材料を提供することにある。

[0005]

【課題を解決するための手段】本発明は、一対の電極 と、これらの電極間に挟持された有機発光層とを備えた 有機エレクトロルミネッセンス素子であって、前記電極 間に設けられた正孔輸送帯域は、下記の一般式(I)、 一般式(II) または一般式(II) ′で表されるフェニレ ンジアミン誘導体を含有し、このフェニレンジアミン誘 導体は、層または域として用いたときの正孔移動度が1 0 - 'c m'/V・s 以上であるとともに、前記有機発光 層は電荷注入補助材を含有していることを特徴とする。

[0006] 【化12】

$$Ar^{1}-N$$

$$Ar^{2}$$

$$R^{1}$$

$$R^{2}$$

$$Ar^{5}$$

$$Ar^{5}$$

$$Ar^{5}$$

一般式(I)

【0007】 [Ar'~Ar'は、水素原子、炭素数1~ 6のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数6~24 のアリール基、もしくはスチリル基によって置換されて いてもよい核炭素数6~24のアリール基である。Xは 連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレ ン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、 エーテル結合、チオエーテル結合、置換もしくは無置換 のビニル結合または芳香族へテロ環である。R'、R 20 'は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ 基、または水素原子であって、互いに結合して置換もし くは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。〕 [0008]

【化13】

30

一般式(II)

【0009】 [Ar'~Ar''は、水素原子、炭素数1 ~6のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数6~2 4のアリール基、もしくはスチリル基によって置換され ていてもよい核炭素数6~24のアリール基である。Y 40 は連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレ ン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、 エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族ヘテロ環、ま たは置換もしくは無置換のビニル結合である。R¹、R¹ は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ 基、または水素原子であって、互いに結合して置換もし くは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。〕 [0010]

【化14】

一般式(Ⅱ)'

【0011】 [Ar'~Ar''は、水素原子、炭素数1 ~6のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数6~2 4のアリール基、もしくはスチリル基によって置換され ていてもよい核炭素数6~24のアリール基である。Y は連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレ ン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、 エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族ヘテロ環、ま たは置換もしくは無置換のビニル結合である。R'、R' は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ 基、または水素原子であって、互いに結合して置換もし くは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。〕 【0012】ここで、正孔輸送帯域とは、有機EL素子 において、陽極から注入された正孔を輸送する機能を持 った領域のことである。正孔を輸送する機能とは104 ~10°V/cmの電界印加時に少なくとも10-'cm ¹/V・s以上の正孔移動度を有することである。具体 的な正孔輸送帯域としては、例えば、正孔注入層、正孔 輸送層等を挙げることができ、発光層が含まれる場合も ある。本発明において、一般式(I)、(II)および(I 30 I) ′で表される化合物は、フェニレンジアミン構造を 有して、イオン化ポテンシャルが小さく、その上、X、 Yで示される中心骨格により優れた正孔移動度を確保で きる。本発明では、この正孔注入・輸送材料として好適 なフェニレンジアミン誘導体が正孔輸送帯域に含まれて いるので、有機EL素子の駆動電圧を低減できるととも に、連続駆動による駆動電圧の上昇を抑制できる。

【0013】さらに、本発明において、電荷注入補助材 を含有する発光層を用いることが必須である。ここで、 電荷注入補助材とは、発光層を形成する主材料のイオン 化エネルギーよりも小さいイオン化エネルギーを保有す る化合物であり、好ましくは、0.1wt%~20wt %添加することにより発光層への正孔注入を補助する材 料のことである。この電荷注入補助材を添加することに より、本発明の有機EL素子は、駆動電圧を低減できる とともに、この駆動電圧を安定化することができるよう になった。前述したフェニレンジアミンの使用と発光層 への電荷注入補助材の添加により、従来では得られなか ったような効果を発現できる。このような電荷注入補助 材としては、スチリルアミン誘導体、ジスチリルアリー 50

レン誘導体、トリススチリルアリーレン誘導体、ジアミ ン誘導体などの化合物を用いることができ、特に、5. 0~5.6 e Vのイオン化エネルギーを保有する化合物 が好ましい。なお、電荷注入補助材は発光層で生じる正 孔と電子の再結合に応答して光を放出してもよいし、光 を放出せずに電荷注入の補助作用のみの効果を発現して もよい。

【0014】また、前述した正孔輸送帯域は、前記一般 式(I)、一般式(II) または一般式(II) ′で表され 10 るフェニレンジアミン誘導体を含有する正孔注入層を有 して構成されていることが望ましい。或いは、正孔輸送 帯域は、前記一般式(I)、一般式(II)または一般式 (II) 'で表されるフェニレンジアミン誘導体を含有す る正孔輸送層を有して構成されていてもよい。

【0015】以上において、前記一般式(I)中のAr' ~Ar'のうち、少なくともひとつが核炭素数10~2 4の縮合芳香族環であることが望ましい。これによる と、低電圧駆動できる上に素子の長寿命化を図ることが できる。

【0016】一方、本発明の化合物は、下記の一般式 (III)

[0017]

【化15】

20

$$A_{\Gamma^{13}-N} = A_{\Gamma^{14}} - A_{\Gamma^{14}} - A_{\Gamma^{16}} - A_{\Gamma^{16}} - A_{\Gamma^{17}} - A_{\Gamma^{18}}$$

一般式(III)

【0018】 [Ar''*~Ar'*は、水素原子、炭素数1 ~6のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数6~2 4のアリール基、もしくはスチリル基によって置換され ていてもよい核炭素数6~24のアリール基である。X は連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレ ン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、 エーテル結合、チオエーテル結合、置換または無置換の 40 ピニル結合、芳香族ヘテロ環である。R'、R'は、炭素 数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ基、または 水素原子であって、互いに結合して置換もしくは無置換 の五員環または六員環を形成してもよい。但し、Ar¹³ ~A r¹⁸、Xの少なくとも1つは、スチリル基含有のア リール基であるか、または、Ar''、Ar''および下記 化学式16で示される基本骨格のいずれかが縮合芳香族 環、芳香族へテロ環、または置換もしくは無置換のビニ ル結合を含む〕で表されるフェニレンジアミン誘導体で ある。

[0019]

【化16】

【0020】また、本発明の化合物は、一般式 (IV) 【0021】

【化17】

一般式 (IV)

【0022】 [Ar''へAr''は、水素原子、炭素数1 ~6のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数6~2 4のアリール基、もしくは、スチリル基によって置換さ れていてもよい核炭素数6~24のアリール基である。 Yは連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリー レン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレ ン、エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族ヘテロ 環、または置換もしくは無置換のピニル結合である。R *、R'®は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアル コキシ基、または水素原子であって、互いに結合して置 換もしくは無置換の五員環または六員環を形成してもよ 30 い。但し、Ar¹⁹~Ar²⁴、Yのうち少なくとも1つ は、スチリル基含有のアリール基であるか、または、下 記化学式18で示される基本骨格のいずれかが縮合芳香 族環、芳香族ヘテロ環、置換または無置換のビニル結合 を含む。〕で表されるフェニレンジアミン誘導体であ る。

[0023] [化18]

【0024】もしくは、本発明の化合物は、一般式(V)

[0025]

【化19】

一般式 (V)

【0026】 [Ar's ~ Ar'o は、水素原子、炭素数1~6のアルキル基、またはアルコキシ基、核炭素数6~24のアリール基、もしくはスチリル基によって置換されていてもよい核炭素数6~24のアリール基である。 Yは連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族へテロ環、置換もしくは無置換のビニル結合である。また、R 20 「R'は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ基、または水素原子であって、互いに結合して置換もしくは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。〕で表されるフェニレンジアミン誘導体である。

【0027】さらに、本発明は、一対の電極と、これらの電極間に挟持された有機発光層とを備えた有機エレクトロルミネッセンス素子であって、電極間に設けられた正孔輸送帯域は、下記の一般式(III)、一般式(IV)または一般式(V)で表されるフェニレンジアミン誘導体を含有することを特徴とする。

[0028]

【化20】

$$Ar^{15} = Ar^{16} = Ar^{18} = Ar^{$$

一般式(III)

【0029】 [Ar'' ~ Ar'' は、水素原子、炭素数1~6のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数6~24のアリール基、もしくはスチリル基によって置換されていてもよい炭素数6~24のアリール基である。 Xは連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結合、チオエーテル結合、置換または無置換のビニル結合、芳香族へテロ環である。また、R'、R は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアルコキシ 基、または水素原子であって、互いに結合して置換もし

くは無置換の五員環または六員環を形成してもよい。但 し、Ar¹³~Ar¹⁸、Xの少なくとも1つは、スチリル 基含有のアリール基であるか、または、A r'5、A r'8 および下記化学式21で示される基本骨格のいずれかが 縮合芳香族環、芳香族ヘテロ環、または置換もしくは無 置換のビニル結合を含む。〕

[0030]

【化21】

[0031]

【化22】

一般式 (14)

【0032】 [Ar' ** ~ Ar' * は、水素原子、炭素数1 ~6のアルキル基またはアルコキシ基、核炭素数6~2 4のアリール基、もしくは、スチリル基によって置換さ れていてもよい核炭素数6~24のアリール基である。 Yは連結基であり、単結合、核炭素数 $6\sim24$ のアリー 30 る化合物である。一般式(I)、(II) および(II) 'レン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレ ン、エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族ヘテロ 環、または置換もしくは無置換のビニル結合である。ま た、R'、R'0は、炭素数1~6のアルキル基、もしく はアルコキシ基、または水素原子であって、互いに結合 して置換もしくは無置換の五員環または六員環を形成し てもよい。但し、Ar''~Ar''、Yのうち少なくとも 1つは、スチリル基含有のアリール基であるか、また は、下記化学式23で示される基本骨格のいずれかが縮 合芳香族環、芳香族へテロ環、置換または無置換のビニ 40 キシ、n-プトキシ、s-プトキシ、t-プトキシ、n ル結合を含む。〕

[0033]

【化23】

[0034]

【化24】

14

一般式 (V)

【0035】 [Ar'5~Ar'0は、水素原子、炭素数1 ~6のアルキル基、またはアルコキシ基、核炭素数6~ 24のアリール基、もしくは、スチリル基によって置換 されていてもよい核炭素数6~24のアリール基であ る。Yは連結基であり、単結合、核炭素数6~24のア リーレン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチ レン、エーテル結合、チオエーテル結合、芳香族ヘテロ 20 環、置換もしくは無置換のビニル結合である。また、R ''、R''は、炭素数1~6のアルキル基、もしくはアル コキシ基、または水素原子であって、互いに結合して置 換もしくは無置換の五員環または六員環を形成してもよ (.44

[0036]

【発明の実施の形態】〔有機EL素子〕

(A) フェニレンジアミン誘導体

本発明の有機EL素子に用いられるフェニレンジアミン 誘導体は、一般式(I)(II)および(II)′で表され において、核炭素数6~24のアリール基の例として は、フェニル基、ピフェニル基、ナフチル基、アントラ ニル基、ターフェニル基、ピレニル基等が挙げられる。 特に、フェニル基、ナフチル基が好適である。炭素数1 ~6のアルキル基の例としては、メチル、エチル、n-プロピル、iープロピル、nーブチル、sーブチル、t - ブチル、n - ペンチル、n - ヘキシル等が挙げられ る。また炭素数1~6のアルコキシ基の例として、メト キシ、エトキシ、n-プロピルオキシ、i-プロピルオ -ペンチルオキシ、n-ヘキシルオキシ基等が挙げられ る。スチリル基としては、1-フェニルピニル-1-イ ル、2-フェニルピニル-1-イル、2,2-ジフェニ ルビニルー1ーイル、2-フェニルー2-(ナフチルー 1-イル) ピニルー1-イル、2, 2-ピス(ジフェニ ル-1-イル) ビニル-1-イル基などが挙げられる。 特に、2、2-ジフェニルビニル-1-イル基が好適で ある。

【0037】また、一般式(I)におけるX、一般式(I 50 I) におけるYおよび一般式(II) ′におけるYはそれ

ぞれ連結基であり、単結合、核炭素数6~24のアリー レン、炭素数1~6のアルキレン、ジフェニルメチレ ン、エーテル結合、チオエーテル結合、置換もしくは無 置換のビニル結合または、芳香族ヘテロ環である。核炭 素数6~24のアリーレンの例としては、フェニレン、 ピフェニレン、ナフチレン、アントラニレン、ターフェ ニルレン、ピレニレン等が挙げられる。 炭素数 1~6の アルキレンとしては、メチレン、イソプロピレン、シク ロプロピレン、シクロヘキシレン、シクロペンタレン等 ~6のアルキルまたはアルコキシ基で置換されていても よい。芳香族ヘテロ環の例としては、ピロール、フラ ン、チオフェン、シロール、トリアジン、オキサジアゾ ール、トリアゾール、オキサゾール、キノリン、キノキ サリン、ピリミジン等である。

【0038】一般式(I)の化合物は、Ar'~Ar'の うち少なくともひとつが核炭素数10~24の縮合芳香 族環またはスチリル基に置換されたフェニル基であるこ とが好ましい。そのような縮合芳香族環としては、ナフ げられるが、特に好適なのはナフチル基である。スチリ ル基としては、1-フェニルビニル-1-イル、2-フ ェニルピニルー1ーイル、2,2ージフェニルピニルー 1-イル、2-フェニル-2-(ナフチル-1-イル) ビニルー1ーイル、2,2ービス(ジフェニルー1ーイ ル) ビニル-1-イル基などが挙げられる。特に2,2 - ジフェニルビニル-1-イル基が好適である。 R'、 R'として、好ましいアルキル基の例としては、メチル エチル、i-プロピル、t-ブチル等であり、好ましい アルコキシ基の例としては、メトキシ、エトキシ、iー プロポキシ、tープトキシ等である。また、Xが単結合 であるときは、R'、R'が結合し、置換または無置換の フルオレンからなる2価の基も好ましい。

【0039】また、一般式 (II) 中の、Ar¹~Ar¹ のうち少なくともひとつは、核炭素数10~24のスチ リル基で置換されたアリール基であるか、Ar'~Ar 11、Yのいずれかが核炭素数10~24の縮合芳香族 環、芳香族ヘテロ環、または置換もしくは無置換のビニ ル基である。そのような縮合芳香族環の例としては、ナ フチル、アントラニル、ピレニル、フェナンスリル基が 40 挙げられるが、特に好適なのはナフチル基である。スチ リル基としては、1-フェニルビニル-1-イル、2-フェニルビニルー1ーイル、2,2ージフェニルビニル -1-イル、2-フェニル-2-(ナフチル-1-イ ル) ビニルー1ーイル、2, 2ービス (ジフェニルー1 -イル) ビニル-1-イル基などが挙げられる。特に 2, 2-ジフェニルビニル-1-イル基が好適である。 芳香族へテロ環としては、ピロール、フラン、チオフェ ン、シロール、トリアジン、オキサジアゾール、トリア ゾール、オキサゾール、キノキサリン、ピリミジンなど 50

である。

【0040】R'、R'として、好ましいアルキル基の例 としては、メチルエチル、i-プロピル、t-ブチル等 であり、好ましいアルコキシ基の例としては、メトキ シ、エトキシ、iープロポキシ、tーブトキシ等であ る。また、Yが単結合であるときは、R¹、R¹が結合 し、置換または無置換のフルオレンからなる2価の基も 好ましい。

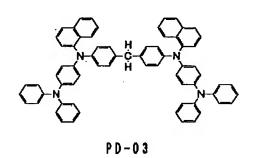
【0041】また、一般式(II) ´中の、Ar¹~Ar が挙げられる。ジフェニルメチレンは、前述の炭素数1 10 10つうち少なくともひとつは、核炭素数10~24のス チリル基で置換されたアリール基であるか、Ar¹~A r''、Yのいずれかが核炭素数10~24の縮合芳香族 環、芳香族へテロ環、または置換もしくは無置換のビニ ル基である。そのような縮合芳香族環の例としては、ナ フチル、アントラニル、ピレニル、フェナンスリル基が 挙げられるが、特に好適なのはナフチル基である。スチ リル基としては、1-フェニルピニル-1-イル、2-フェニルビニルー1ーイル、2,2-ジフェニルビニル -1-イル、2-フェニル-2-(ナフチル-1-イ チル、アントラニル、ピレニル、フェナンスリル基が挙 20 ル)ビニル-1-イル、2,2-ビス(ジフェニル-1 -イル) ピニル-1-イル基などが挙げられる。特に 2, 2-ジフェニルビニル-1-イル基が好適である。 芳香族へテロ環としては、ピロール、フラン、チオフェ ン、シロール、トリアジン、オキサジアゾール、トリア ゾール、オキサゾール、キノキサリン、ピリミジンなど である。R'、R'として、好ましいアルキル基の例とし ては、メチルエチル、i-プロピル、t-ブチル等であ り、好ましいアルコキシ基の例としては、メトキシ、エ トキシ、i-プロポキシ、t-ブトキシ等である。ま 30 た、Yが単結合であるときは、R⁵、R⁶が結合し、置換 または無置換のフルオレンからなる2価の基も好まし

> 【0042】このような本発明の化合物は、素子の正孔 輸送帯域に含有されるため、10°~10°V/cmの電 界印加時に10-'cm'/V・s以上の正孔移動度を有 するものとされている。

> 【0043】そして、前記一般式(I)で表されるフェ ニレンジアミン誘導体の具体例としては、以下の化学式 $(PD-01) \sim (PD-59)$, (STBA-1) τ 表される化合物が挙げられる。なお、本発明は、これら に限定されるものではない。

[0044]

【化25】



PD-04

[0047] [化28]

[0048] 30 [化29]



[0049] [化30]

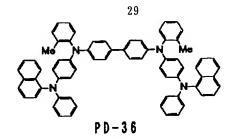
30 【0050】

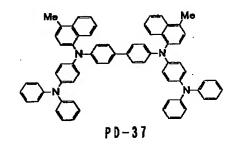
[0051] [化32]

30

[0053] 【化34] [0054] [化35]

[0055] 【化36】 [0056] [化37]



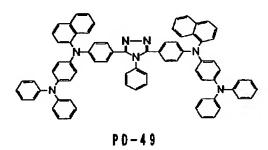


[0057] [化38]

[0058] 【化39】

PD-44

[0060] 【化41】



PD-50

[0061] [化42]

PD-51

[0062] [化43]

[0063]

【化44】

37

【0064】そして、前記一般式(II)で表されるフェニレンジアミン誘導体の具体例としては、以下の化学式 (PT-01)~ [PT-31]で表される化合物が挙 30 げられる。なお、本発明は、これらに限定されるものではない。

[0065]

【化45】

[0066] 【化46]

[0067] 【化47】

PT-08

[0068] [化48]

[0069] 【化49]

[0071] 【化51】

[0072] [化52]

[0073] [化53] [0074] 30 [化54]

[0075] 【化55]

PT-31

【0076】このような一般式(I)、(II) および(II) かの化合物は、イオン化ポテンシャルが小さいために、精製中に酸化を受けるなど、不純物が混入しやすく、この不純物によって、正孔移動度が小さくなる場合がある。すなわち、前述した特開平9-301934号公報の方法では、蛍光スペクトルで観測されたように、高分子量芳香族アミン化合物に不純物が混入するため、

トラップ等により十分な正孔移動度が得られない。これに対し、本発明者らが化合物の精製方法について鋭意検討した結果、カラム精製の際に、溶媒としてトルエン/ヘキサン系の溶媒を用いることで純粋な化合物が得られることを見出した。この精製方法によれば、特開平9-301934号公報に開示されたカラム精製にハロゲン系溶媒を用いる方法よりも純度の高い化合物が得られる。さらに、0.01mmHg以下の高真空下で昇華精製を行うことにより、図1に示すようなピーク波長が400~480nmの間にある蛍光スペクトルを備えた純粋なフェニレンジアミン二量体を得ることができる。このように、本発明者らは、青色ないし紫色蛍光(ピーク波長400~480nm)を示す本発明のフェニレンジアミン二量体でなければ、正孔移動度が10-'cm'/ソ・s以上とならないことを確認している。

【0077】(B)有機EL素子の構成、材料本発明の化合物を含有させて有機EL素子を作製するにあたっては、通常有機EL素子を作製する際に用いられる構成、材料を用いることが可能である。以下、その為20の適切な構成、材料について説明する。

【0078】 $\langle 1 \rangle$ 有機EL素子の構成 以下に本発明に用いられる有機EL素子の代表的な構成 例を示す。もちろん、本発明はこれに限定されるもので はない。

①陽極/発光層/陰極

- 2)陽極/正孔注入層/発光層/陰極
- ③陽極/発光層/電子注入層/陰極
- 4 陽極/正孔注入層/発光層/電子注入層/陰極
- ⑤陽極/有機半導体層/発光層/陰極
- 30 ⑥陽極/有機半導体層/電子障壁層/発光層/陰極
 - ⑦陽極/有機半導体層/発光層/付着改善層/陰極
 - ⑧陽極/正孔注入層/正孔輸送層/発光層/電子注入層/陰極

などの構造を挙げることができる。これらの中で通常®の構成が好ましく用いられる。本発明の化合物は、このような構成要素中の正孔輸送帯域に含有されている。含有させる量は30~100モル%から選ばれる。

【0079】〈2〉透光性基板

本発明の有機EL素子は透光性の基板上に作製する。こ 2 でいう透光性基板は有機EL素子を支持する基板であ り、400~700nmの可視領域の光の透過率が50%以上で、平滑な基板が好ましい。具体的には、ガラス 板、ポリマー板等が挙げられる。ガラス板としては、特にソーダ石灰ガラス、パリウム・ストロンチウム含有ガラス、鉛ガラス、アルミノケイ酸ガラス、ホウケイ酸ガラス、バリウムホウケイ酸ガラス、石英等が挙げられる。またポリマー板としては、ポリカーボネート、アクリル、ポリエチレンテレフタレート、ポリエーテルサルファイド、ポリサルフォン等を挙げることができる。

0 【0080】〈3〉陽極

【化56】

52

【0083】この一般式において、Xは下記化合物を示 す。

[0084]

【化57】

[0085] CCT, ntd2, 3, 4, stt 5Tb る。またYは下記化合物を示す。

[0086]

【化58】



【0087】このような一般式で表される化合物は、フ ②輸送機能: 注入した電荷(電子と正孔)を電界の力で 20 ェニル基、フェニレン基、ナフチル基に、炭素数1~4 のアルキル基、アルコキシ基、水酸基、スルホニル、カ ルポニル基、アミノ基、ジメチルアミノ基またはジフェ ニルアミノ基等が、単独または複数置換したものであっ てもよい。また、これらは互いに結合し、飽和五員環、 飽和六員環を形成してもよい。またフェニル基、フェニ レン基、ナフチル基にパラ位で結合したものは結合性が 良く、平滑な蒸着膜の形成のために好ましい。具体的に は以下の化合物である。特に、p-クォーターフェニル 誘導体、p-クインクフェニル誘導体が好ましい。

[0088]

【化59】

51

陽極としては、仕事関数の大きい(4eV以上)金属、 合金、電気伝導性化合物またはこれらの混合物を電極物 質とするものが好ましく用いられる。このような電極物 質の具体例としては、Au等の金属、CuI、ITO、 Sn〇,、Zn〇等の導電性材料が挙げられる。陽極は これらの電極物質を蒸着法やスパッタリング法等の方法 で薄膜を形成させることにより作製することができる。 このように発光層からの発光を陽極から取り出す場合、 陽極の発光に対する透過率を10%より大きくすること が好ましい。また陽極のシート抵抗は、数百Ω/口以下 10 が好ましい。陽極の膜厚は材料にもよるが、通常10 n m~1 μm、好ましくは10~200 nmの範囲で選択 される。

【0081】〈4〉有機発光層

有機EL素子の発光層は以下の機能を併せ持つものであ る。すなわち、

①注入機能;電界印加時に陽極または正孔注入層より正 孔を注入することができ、陰極または電子注入層より電 子を注入することができる機能

移動させる機能

③発光機能;電子と正孔の再結合の場を提供し、これを 発光につなげる機能がある。但し、正孔の注入されやす さと電子の注入されやすさに違いがあってもよく、また 正孔と電子の移動度で表される輸送能に大小があっても よいが、どちらか一方の電荷を移動させることが好まし い。有機EL素子の発光材料は主に有機化合物であり、 具体的には所望の色調により次のような化合物が挙げら れる。まず、紫外域から紫色の発光を得る場合には、下 記の一般式で表される化合物が挙げられる。

[0082]

[0089] 【化60】

【0090】また、青色から緑色の発光を得るために は、例えばベンゾチアゾール系、ベンゾイミダゾール 系、ベンゾオキサゾール系等の蛍光増白剤、金属キレー ト化オキシノイド化合物、スチリルベンゼン系化合物を 挙げることができる。具体的に化合物名を示せば、例え ば、特開昭59-194393号公報に開示されている ものを挙げることができる。さらに他の有用な化合物は 30 ケミストリー・オブ・シンセティック・ダイズ197 1,628~637頁および640頁に列挙されてい る。前記キレート化オキシノイド化合物としては、例え ば、特開昭63-295695号公報に開示されている ものを用いることができる。その代表例としては、トリ ス(8-キノリノール)アルミニウム(以下Algと略 記する) 等の8-ヒドロキシキノリン系金属錯体やジリ チウムエピントリジオン等を挙げることができる。前記 スチリルベンゼン系化合物としては、例えば、欧州特許 第0319881号明細書や欧州特許第0373582 号明細書に開示されているものを用いることができる。 また、特開平2-252793号公報に開示されている ジスチリルピラジン誘導体も発光層の材料として用いる ことができる。その他のものとして、例えば、欧州特許 第0387715号明細書に開示されているポリフェニ ル系化合物も発光層の材料として用いることもできる。

【0091】 さらに、上述した蛍光増白剤、金属キレート化オキシノイド化合物およびスチリルベンゼン系化合物等以外に、例えば、12-フタロペリノン(J.Appl.Phys.,第27巻, L713(1988

年))、1,4-ジフェニル-1,3-プタジエン、 1, 1, 4, 4-テトラフェニル-1, 3-ブタジエン (以上Appl.Phys.Lett.,第56巻, L79 9 (1990年))、ナフタルイミド誘導体(特開平2 -305886号公報)、ペリレン誘導体(特開平2-189890号公報)、オキサジアゾール誘導体(特開 平2-216791号公報、または第38回応用物理学 関係連合講演会で浜田らによって開示されたオキサジア ゾール誘導体)、アルダジン誘導体(特開平2-220 10 393号公報)、ピラジリン誘導体(特開平2-220 394号公報)、シクロペンタジエン誘導体(特開平2 -289675号公報)、ピロロピロール誘導体(特開 平2-296891号公報)、スチリルアミン誘導体 (Appl.Phys.Lett.,第56巻, L799 (1990年)、クマリン系化合物(特開平2-191 694号公報)、国際特許公報WO90/13148や Appl. Phys. Lett., vol 58, 18, P1 982 (1991) に記載されているような高分子化合 物等も、発光層の材料として用いることができる。

20 【0092】本発明では特に発光層の材料として、芳香族ジメチリディン系化合物(欧州特許第0388768号明細書や特開平3-231970号公報に開示のもの)を用いることが好ましい。具体例としては、4,4'ービス(2,2-ジーtープチルフェニルビニル)ビフェニル、(以下、DTBPBBiと略記する)、4,4'ービス(2,2-ジフェニルビニル)ビフェニル(以下DPVBiと略記する)等、およびそれらの誘導体を挙げることができる。

【0093】さらに、特開平5-258862号公報等に記載されている一般式(Rs-Q)、-Al-O-Lで表される化合物も挙げられる(上記式中、Lはフェニル部分を含んでなる炭素原子 $6\sim24$ 個の炭化水素であり、O-Lはフェノラート配位子であり、Qは置換8-キノリノラート配位子を表し、Rsはアルミニウム原子に置換8-キノリノラート配位子が2個を上回り結合するのを立体的に妨害するように選ばれた8-キノリノラート、環置換基を表す)。具体的には、ビス(2-メチル-8-キノリノラート)(パラーフェニルフェノラート)アルミニウム(III)(以下PC-7)、ビス(2-メチル-8-キノリノラート)(1-ナフトラート)アルミニウム(III)(以下PC-17)等が挙げられる。

【0094】その他、特開平6-9953号公報等によるドーピングを用いた高効率の青色と緑色の混合発光を得る方法が挙げられる。この場合、ホストとしては上記に記載した発光材料、ドーパントとしては青色から緑色までの強い蛍光色素、例えば、クマリン系あるいは上記記載のホストとして用いられているものと同様な蛍光色素を挙げることができる。具体的にはホストとして、ジスチリルアリーレン骨格の発光材料、特に好ましくはD

PVBi、ドーパントとしてはジフェニルアミノビニル アリーレン、特に好ましくは、例えば、N、N-ジフェ ニルアミノビニルベンゼン (DPAVB) を挙げること ができる。

【0095】白色の発光を得る発光層としては特に制限 はないが、下記のものを挙げることができる。

①有機EL積層構造体の各層のエネルギー準位を規定 し、トンネル注入を利用して発光させるもの(欧州特許 第0390551号公報)。

②①と同じくトンネル注入を利用する素子で実施例とし 10 て白色発光素子が記載されているもの(特開平3-23 0584号公報)。

③二層構造の発光層が記載されているもの(特開平2-220390号公報および特開平2-216790号公 報)。

④発光層を複数に分割してそれぞれ発光波長の異なる材 料で構成されたもの(特開平4-51491号公報)。

⑤青色発光体(蛍光ピーク380~480nm)と緑色 発光体(480~580nm)とを積層させ、さらに赤 色蛍光体を含有させた構成のもの(特開平6-2071 70号公報)。

6青色発光層が青色蛍光色素を含有し、緑色発光層が赤 色蛍光色素を含有した領域を有し、さらに緑色蛍光体を 含有する構成のもの(特開平7-142169号公 報)。

中でも、⑤の構成のものが好ましく用いられる。ここ で、赤色蛍光体の例を以下に示す。

[0096]

【化61】

ð

【0097】前記材料を用いて発光層を形成する方法と しては、例えば、蒸着法、スピンコート法、LB法等の 公知の方法を適用することができる。発光層は、特に分 子堆積膜であることが好ましい。ここで分子堆積膜と は、気相状態の材料化合物から沈着され形成された薄膜 や、溶液状態または液相状態の材料化合物から固体化さ れ形成された膜のことであり、通常この分子堆積膜は、 40 LB法により形成された薄膜(分子累積膜)とは凝集構 造、高次構造の相違や、それに起因する機能的な相違に より区分することができる。また特開昭57-5178 1号公報に開示されているように、樹脂等の結着剤と材 料化合物とを溶剤に溶かして溶液とした後、これをスピ ンコート法等により薄膜化することによっても、発光層 を形成することができる。

【0098】このようにして形成される発光層の膜厚に ついては特に制限はなく、状況に応じて適宜選択するこ とができるが、通常5nm~5μmの範囲が好ましい。 50 この発光層は、上述した材料の一種または二種以上から

なる一層で構成されてもよいし、または前記発光層とは 別種の化合物からなる発光層を積層したものであっても よい。

【0099】〈5〉正孔注入層、正孔輸送層 正孔注入、輸送層は発光層への正孔注入を助け、発光領 域まで輸送する層であって、正孔移動度が大きく、イオ ン化エネルギーが通常5.5eV以下と小さい。このよ うな正孔注入、輸送層としては、より低い電界強度で正 孔を発光層に輸送する材料が好ましく、さらに正孔の移 動度が、例えば10°~10°V/cmの電界印加時に、 少なくとも10-'cm'/V・秒であれば好ましい。こ こで、正孔注入、輸送材料として、前述した一般式 (I) または一般式(II) で表されるフェニレンジアミ ン誘導体を用いることが好ましい。この際、前述した本 発明の化合物単独で正孔注入、輸送層を形成しても良い し、他の材料と混合して用いてもよい。本発明の化合物 と混合して正孔注入、輸送層を形成する材料としては、 前記の好ましい性質を有するものであれば特に制限はな く、従来、光導伝材料において正孔の電荷輸送材料とし て慣用されているものや、EL素子の正孔注入層に使用 20 される公知のものの中から任意のものを選択して用いる ことができる。

【0100】具体例として、例えば、トリアゾール誘導 体(米国特許3,112,197号明細書等参照)、オ キサジアゾール誘導体(米国特許3,189,447号 明細書等参照)、イミダゾール誘導体(特公昭37-1 6096号公報等参照)、ポリアリールアルカン誘導体 (米国特許3, 615, 402号明細書、同第3, 82 0,989号明細書、同第3,542,544号明細 書、特公昭45-555号公報、同51-10983号 30 公報、特開昭51-93224号公報、同55-171 05号公報、同56-4148号公報、同55-108 667号公報、同55-156953号公報、同56-36656号公報等参照)、ピラゾリン誘導体およびピ ラゾロン誘導体(米国特許第3,180,729号明細 書、同第4,278,746号明細書、特開昭55-8 8064号公報、同55-88065号公報、同49-105537号公報、同55-51086号公報、同5 6-80051号公報、同56-88141号公報、同 57-45545号公報、同54-112637号公 報、同55-74546号公報等参照)、フェニレンジ アミン誘導体(米国特許第3,615,404号明細 書、特公昭51-10105号公報、同46-3712 号公報、同47-25336号公報、特開昭54-53 435号公報、同54-110536号公報、同54-119925号公報等参照)、アリールアミン誘導体 (米国特許第3, 567, 450号明細書、同第3, 1 80,703号明細書、同第3,240,597号明細 書、同第3,658,520号明細書、同第4,23 2, 103号明細書、同第4, 175, 961号明細

書、同第4,012,376号明細書、特公昭49-3 5702号公報、同39-27577号公報、特開昭5 5-144250号公報、同56-119132号公 報、同56-22437号公報、西独特許第1,11 0,518号明細書等参照)、アミノ置換カルコン誘導 体(米国特許第3,526,501号明細書等参照)、 オキサゾール誘導体(米国特許第3,257,203号 明細書等に開示のもの)、スチリルアントラセン誘導体 (特開昭56-46234号公報等参照)、フルオレノ ン誘導体(特開昭54-110837号公報等参照)、 ヒドラゾン誘導体(米国特許第3,717,462号明 細書、特開昭54-59143号公報、同55-520 63号公報、同55-52064号公報、同55-46 760号公報、同55-85495号公報、同57-1 1350号公報、同57-148749号公報、特開平 2-311591号公報等参照)、スチルベン誘導体 (特開昭61-210363号公報、同第61-228 451号公報、同61-14642号公報、同61-7 2255号公報、同62-47646号公報、同62-36674号公報、同62-10652号公報、同62 -30255号公報、同60-93455号公報、同6 0-94462号公報、同60-174749号公報、 同60-175052号公報等参照)、シラザン誘導体 (米国特許第4, 950, 950号明細書)、ポリシラ ン系(特開平2-204996号公報)、アニリン系共 重合体(特開平2-282263号公報)、特開平1-211399号公報に開示されている導電性高分子オリ ゴマー(特にチオフェンオリゴマー)等を挙げることが できる。

60

【0101】正孔注入層の材料としては上記のものを使 用することができるが、ポルフィリン化合物(特開昭6 3-2956965号公報等に開示のもの)、芳香族第 三級アミン化合物およびスチリルアミン化合物(米国特 許第4, 127, 412号明細書、特開昭53-270 33号公報、同54-58445号公報、同54-14 9634号公報、同54-64299号公報、同55-79450号公報、同55-144250号公報、同5 6-119132号公報、同61-295558号公 報、同61-98353号公報、同63-295695 40 号公報等参照)、特に芳香族第三級アミン化合物を用い ることが好ましい。また、米国特許第5,061,56 9号に記載されている2個の縮合芳香族環を分子内に有 する、例えば4, 4'ーピス(N-(1-ナフチル)-N-フェニルアミノ)ピフェニル(以下NPDと略記す る)、また特開平4-308688号公報に記載されて いるトリフェニルアミンユニットが3つスターパースト 型に連結された4,4',4"-トリス(N-(3-メ **チルフェニル)-N-フェニルアミノ)トリフェニルア** ミン(以下MTDATAと略記する)等を挙げることが 50 できる。

【0102】また、発光層の材料として示した前述の芳 香族ジメチリディン系化合物の他、p型Si、p型Si C等の無機化合物も正孔注入層の材料として使用するこ とができる。正孔注入、輸送層は上述した化合物を、例 えば真空蒸着法、スピンコート法、キャスト法、LB法 等の公知の方法により薄膜化することにより形成するこ とができる。正孔注入、輸送層としての膜厚は特に制限 はないが、通常は5nm~5μmである。この正孔注 入、輸送層は正孔輸送帯域に本発明の化合物を含有して 層で構成されてもよいし、または前記正孔注入、輸送層 とは別種の化合物からなる正孔注入、輸送層を積層した ものであってもよい。

【0103】また、有機半導体層は、発光層への正孔注 入または電子注入を助ける層であって、10 - 1°S/c m以上の導電率を有するものが好適である。このような 有機半導体層の材料としては、含チオフェンオリゴマー や特開平8-193191号公報に開示してある含アリ ールアミンオリゴマー等の導電性オリゴマー、含アリー

ルアミンデンドリマー等の導電性デンドリマー等を用い ることができる。

【0104】〈6〉電子注入層

電子注入層は、発光層への電子の注入を助ける層であっ て、電子移動度が大きく、また付着改善層は、この電子 注入層の中で特に陰極との付着が良い材料からなる層で ある。電子注入層に用いられる材料としては、8-ヒド ロキシキノリンまたはその誘導体の金属錯体が好適であ る。上記8-ヒドロキシキノリンまたはその誘導体の金 いれば、上述した材料の一種または二種以上からなる一 10 属錯体の具体例としては、オキシン(一般に8-キノリ ノールまたは8-ヒドロキシキノリン)のキレートを含 む金属キレートオキシノイド化合物が挙げられる。例え ば、発光材料の項で記載したAlgを電子注入層として 用いることができる。一方、オキサジアゾール誘導体と しては、以下の一般式で表される電子伝達化合物が挙げ られる。

> [0105] 【化62】

[0106] (式中Ar31, Ar32, Ar33, Ar35, 基を示し、それぞれ互いに同一であっても異なっていて もよい。またAr³⁴, Ar³⁷, Ar³⁸は置換または無置 換のアリーレン基を示し、それぞれ同一であっても異な っていてもよい。)

【0107】ここで、アリール基としては、フェニル 基、ピフェニル基、アントラニル基、ペリレニル基、ピ レニル基が挙げられる。またアリーレン基としてはフェ

ニレン基、ナフチレン基、ピフェニレン基、アントラニ Ar³6、Ar³⁹はそれぞれ置換または無置換のアリール 30 レン基、ペリレニレン基、ピレニレン基などが挙げられ る。また置換基としては炭素数1~10のアルキル基、 炭素数1~10のアルコキシ基またはシアノ基等が挙げ られる。この電子伝達化合物は薄膜形成性のものが好ま しい。上記電子伝達性化合物の具体例としては下記のも のを挙げることができる。

> [0108] 【化63】

【0109】〈7〉陰極

陰極としては、仕事関数の小さい(4 e V以下)金属、合金、電気伝導性化合物およびこれらの混合物を電極物質とするものが用いられる。このような電極物質の具体例としては、ナトリウム、ナトリウムーカリウム合金、マグネシウム、リチウム、マグネシウム・銀合金、アルミニウム/酸化アルミニウム、アルミニウム・リチウム合金、インジウム、希土類金属などが挙げられる。この陰極は、これらの電極物質を蒸着やスパッタリング等の方法により薄膜を形成させることにより、作製することができる。ここで、発光層からの発光を陰極から取り出す場合、陰極の発光に対する透過率は10%より大きくすることが好ましい。また、陰極としてのシート抵抗は数百 Ω / \Box 以下が好ましく、膜厚は通常10nm ~ 1 μ m、好ましくは $50\sim200$ nmである。

【0110】 〈8〉有機EL素子の作製

以上例示した材料および方法により陽極、発光層、必要に応じて正孔注入層、および必要に応じて電子注入層を 形成し、さらに陰極を形成することにより有機EL素子 を作製することができる。また、陰極から陽極へ、前記 と逆の順序で有機EL素子を作製することもできる。

【0111】以下、透光性基板上に陽極/正孔注入層/発光層/電子注入層/陰極が順次設けられた構成の有機 EL素子の作製例を記載する。まず、適当な透光性基板上に陽極材料からなる薄膜を1μm以下、好ましくは10~200nmの範囲の膜厚になるように蒸着やスパッタリング等の方法により形成して陽極を作製する。

【0112】次に、この陽極上に正孔注入層を設ける。 正孔注入層の形成は、前述したように真空蒸着法、スピンコート法、キャスト法、LB法等の方法により行うこ とができるが、均質な膜が得られやすく、かつピンホー ルが発生しにくい等の点から真空蒸着法により形成する 50

ことが好ましい。真空蒸着法により正孔注入層を形成す 20 る場合、その蒸着条件は使用する化合物(正孔注入層の 材料)、目的とする正孔注入層の結晶構造や再結合構造 等により異なるが、一般に蒸着源温度50~450℃、真空度10-⁷~10-³ torr、蒸着速度0.01~50nm/秒、基板温度-50~300℃、膜厚5nm~5μmの範囲で適宜選択することが好ましい。

【0113】次に、正孔注入層上に発光層を設ける発光層の形成も、所望の有機発光材料を用いて真空蒸着法、スパッタリング、スピンコート法、キャスト法等の方法により有機発光材料を薄膜化することにより形成できるが、均質な膜が得られやすく、かつピンホールが発生しにくい等の点から真空蒸着法により形成することが好ましい。真空蒸着法により発光層を形成する場合、その蒸着条件は使用する化合物により異なるが、一般的に正孔注入層と同じような条件範囲の中から選択することができる。

【0114】次に、この発光層上に電子注入層を設ける。正孔注入層、発光層と同様、均質な膜を得る必要から真空蒸着法により形成することが好ましい。蒸着条件は正孔注入層、発光層と同様の条件範囲から選択することができる。本発明の化合物は、正孔輸送帯域のいずれの層に含有させるかによって異なるが、真空蒸着法を用いる場合は他の材料との共蒸着をすることができる。またスピンコート法を用いる場合は、他の材料と混合することによって含有させることができる。最後に陰極を積層して有機EL素子を得ることができる。陰極は、金属から構成されるもので、蒸着法、スパッタリングを用いることができる。しかし下地の有機物層を成膜時の損傷から守るためには真空蒸着法が好ましい。これまで記載してきた有機EL素子の作製は一回の真空引きで一貫して陽極から陰極まで作製することが好ましい。

【0115】なお、有機EL素子に直流電圧を印加する場合、陽極を+、陰極を-の極性にして、5~40Vの電圧を印加すると発光が観測できる。また逆の極性で電圧を印加しても電流は流れず、発光は全く生じない。さらに、交流電圧を印加した場合には陽極が+、陰極が-の極性になった時のみ均一な発光が観測される。印加する交流の波形は任意でよい。

【0116】〔フェニレンジアミン誘導体〕本発明のフ ェニレンジアミン二量体を表す一般式(III)、(IV) および(V)における核炭素数6~24のアリール基の 例としては、炭素数1~6のアルキル基およびアルコキ シ基、スチリル基等が挙げられる。核炭素数6~24の アリール基の例としては、フェニル基、ピフェニル基、 ナフチル基、アントラニル基、ターフェニル基、ピレニ ル基等が挙げられ、特に、フェニル基、ナフチル基が好 適である。炭素数1~6のアルキル基の例として、メチ ル、エチル、nープロピル、iープロピル、nーブチ ル、sープチル、tープチル、nーペンチル、nーへキ シル等が挙げられる。また炭素数1~6のアルコキシ基 の例として、メトキシ、エトキシ、n-プロピルオキ シ、i-プロピルオキシ、n-ブトキシ、s-ブトキ シ、 t ープトキシ、 n ーペンチルオキシ、 n ーヘキシル オキシ基等が挙げられる。

【0117】スチリル基としては、1-フェニルビニル-1-イル、<math>2-フェニルビニル-1-イル、<math>2, 2-ジフェニルビニル-1-イル、2-フェニル-2-(ナフチル-1-イル) ビニル-1-イル、2, 2-ビス(ジフェニル-1-イル) ビニル-1-イル基などが挙げられる。特に、2, 2-ジフェニルビニル-1-イル基が好適である。

【0118】一般式(III) におけるX、(IV) における Yおよび(V)におけるYはそれぞれ連結基であり、単 結合、核炭素数6~24のアリーレン、炭素数1~6の アルキレン、ジフェニルメチレン、エーテル結合、チオ エーテル結合、芳香族ヘテロ環、または置換もしくは無 置換のビニル結合である。核炭素数6~24のアリーレ ンの例としては、フェニレン、ピフェニレン、ナフチレ ン、アントラニレン、ターフェニルレン、ピレニレン等 が挙げられる。炭素数1~6のアルキレンとしては、メ チレン、イソプロピレン、シクロプロピレン等が挙げら れる。ジフェニルメチレンは前述の炭素数1~6のアル キルまたはアルコキシ基で置換されていてもよい。芳香 族へテロ環の例としては、ピロール、フラン、チオフェ ン、シロール、トリアジン、オキサジアゾール、トリア ゾール、オキサゾール、キノリン、キノキサリン、ピリ ミジン等である。

【0119】また、一般式 (III) 中のA r¹³~A r¹³ のうち少なくともひとつは、核炭素数 10~24のスチリル基で置換されたアリール基であるか、またはA r¹³、A r¹³ および化学式 5で表される基本骨格構造の 50

いずれかが核炭素数10~24の縮合芳香族環、芳香族 ヘテロ環、または置換もしくは無置換のピニル基であ る。そのような縮合芳香族環の例としては、ナフチル、 アントラニル、ピレニル、フェナンスリル基が挙げられ るが、特に好適なのはナフチル基である。スチリル基と しては、1-フェニルピニル-1-イル、2-フェニル ビニルー1ーイル、2,2ージフェニルビニルー1ーイ ル、2-フェニル-2-(ナフチル-1-イル) ビニル -1-イル、2,2-ビス(ジフェニル-1-イル)ビ ニルー1ーイル基などが挙げられる。特に2,2ージフ ェニルビニル-1-イル基が好適である。 芳香族ヘテロ 環としては、ピロール、フラン、チオフェン、シロー ル、トリアジン、オキサジアゾール、トリアゾール、オ キサゾール、キノリン、キノキサリン、ピリミジンなど である。R'、R'として、好ましいアルキル基の例とし ては、メチルエチル、i - プロピル、t - ブチル等であ り、好ましいアルコキシ基の例としては、メトキシ、エ トキシ、i-プロポキシ、t-ブトキシ等である。ま た、Xが単結合であるときは、R'、R'が結合し、置換 20 または無置換のフルオレンからなる2価の基も好まし 17

【0120】また、一般式 (IV) 中の、Ar''~Ar'' のうち少なくともひとつは、核炭素数10~24のスチ リル基で置換されたアリール基であるか、Ar¹9~Ar 11および化学式7で表される基本骨格構造のいずれかが 核炭素数10~24の縮合芳香族環、芳香族へテロ環、 または置換もしくは無置換のビニル基である。そのよう な縮合芳香族環の例としては、ナフチル、アントラニ ル、ピレニル、フェナンスリル基が挙げられるが、特に 好適なのはナフチル基である。スチリル基としては、1 -フェニルビニル-1-イル、2-フェニルビニル-1 ーイル、2、2-ジフェニルビニル-1-イル、2-フ ェニルー2ー(ナフチルー1ーイル)ビニルー1ーイ ル、2、2-ビス(ジフェニル-1-イル)ビニル-1 -イル基などが挙げられる。特に2,2-ジフェニルビ ニル-1-イル基が好適である。芳香族ヘテロ環として は、ピロール、フラン、チオフェン、シロール、トリア ジン、オキサジアゾール、トリアゾール、オキサゾー ル、キノキサリン、ピリミジンなどである。R⁹、R¹⁰ として、好ましいアルキル基の例としては、メチルエチ ル、i-プロピル、 t -ブチル等であり、好ましいアル コキシ基の例としては、メトキシ、エトキシ、iープロ ポキシ、t-ブトキシ等である。また、Yが単結合であ るときは、R'、R'®が結合し、置換または無置換のフ ルオレンからなる2価の基も好ましい。

【0121】また、一般式(V)中の、Ar²⁵~Ar³⁰のうち少なくともひとつは、核炭素数10~24のスチリル基で置換されたアリール基であるか、Ar²⁵~Ar³⁰、Yのいずれかが核炭素数10~24の縮合芳香族環、芳香族ヘテロ環、または置換もしくは無置換のビニ

ル基であることが好ましい。そのような縮合芳香族環の 例としては、ナフチル、アントラニル、ピレニル、フェ ナンスリル基が挙げられるが、特に好適なのはナフチル 基である。スチリル基としては、1-フェニルピニルー 1-イル、2-フェニルビニル-1-イル、2, 2-ジ フェニルビニルー1ーイル、2ーフェニルー2ー(ナフ チルー1ーイル) ビニルー1ーイル、2, 2ーピス(ジ フェニルー1ーイル) ビニルー1ーイル基などが挙げら れる。特に2、2-ジフェニルビニル-1-イル基が好 適である。芳香族ヘテロ環としては、ピロール、フラ ン、チオフェン、シロール、トリアジン、オキサジアゾ ール、トリアゾール、オキサゾール、キノキサリン、ピ リミジンなどである。R''、R''として、好ましいアル キル基の例としては、メチルエチル、iープロピル、 t - ブチル等であり、好ましいアルコキシ基の例として は、メトキシ、エトキシ、i-プロポキシ、t-ブトキ シ等である。

【0122】そして、前記一般式 (III) で表されるフェニレンジアミン二量体の具体例としては、以下の化学式 [PD-01'] ~ [PD-56'] で表される化合 20 物が挙げられる。なお、本発明は、これらに限定されるものではない。

[0123]

PD-03'

【0124】 【化65】

[0125] 【化66] 【0126】 【化67】

[0127] [化68] [0128] [化69]



[0130] [化71]

[0129] [化70]

[0131] [化72] [0132] [化73]

[0133] 【化74] [0134] [化75]

【0135】 【化76】 [0136] [化77]

PD-40'

PD-41'

[0137] 【化78】

PD-45'

30

【0139】 【化80】

[0140] 【化81】

[0141]

【0142】このような一般式(III)で表されるフェ 体の中でも特に好ましいものであることが判明した。す ニレンジアミン誘導体は、一般式(I)で表される誘導 50 なわち、国際特許公報WO98/30071に開示され

20

87

ている従来公知ものに比べ、①スチリル基含有のアリール基を保有する化合物は、電子が注入された場合でも寿命が長く、蛍光性も高いので、発光材としても用いることができる。②Ar¹⁵、Ar¹⁵および下記化学式83に示される基本骨格のいずれかが縮合芳香族環、芳香族へテロ環、置換または無置換のビニル結合を含む化合物に電子注入がされた場合でも劣化しにくく寿命も長いなど、従来にはない特徴が得られた。

[0143]

【化83】

【0144】そして、前記一般式(IV)で表されるフェニレンジアミン二量体の具体例としては、以下の化学式 $[PT-01'] \sim [PT-11']$ および $[PT-23'] \sim [PT-31']$ で表される化合物が挙げられる。なお、本発明は、これらに限定されるものではない。

[0145]

【化84】

[0146] [化85]

[0147] [化86]

[0148] [化87]

PT-11'

[0149] [化88]

[0150] [化89]

PT-26'

[0151] 【化90】

PT-31'

【0152】また、一般式(IV)、一般式(V)のフェ ニレンジアミン誘導体は、特に好ましいものであること が判明した。これらの化合物は、電子注入の際にも劣化 せず蛍光性が高いため、発光材としても用いることがで きるほか、正孔注入層、正孔輸送層としても、電子注入 耐性のため、長い寿命が得られることが判明した。

[0153]

30

【実施例】次に、本発明の効果を、具体的な実施例に基 づいて説明する。

〔実施例1〕

〈4-ヨードトリフェニルアミンの合成〉トリフェニル アミン (広島和光社(株)製) 125gをエタノール5 1に加熱溶解し、酸化水銀150gを60℃で添加し、 次いで、よう素100gを徐々に添加した。その後、還 流温度で2時間反応した。反応後、熱濾過し、残渣をア セトンで洗浄し、濾液を冷却して析出した結晶を濾別し た。これにシリカゲルを担持したカラムを用い、トルエ

50 ンを展開溶媒にして精製し、52gの目的物を得た。

【0154】〈PD-01の合成〉4,4'-ジアミノ -p-ターフェニレン (ランカスター社製) 10g、1 -ヨードナフタレン(広島和光(株)社製)20g、炭 酸カリウム20g、銅粉末1gおよびニトロベンゼン1 00mlを、300mlの三つロフラスコ中に入れ、2 00℃で48時間加熱攪拌を行なった。反応後、無機物 を濾別し、母液の溶媒を留去した。その残渣をシリカゲ ル (広島和光 (株) 社製 C-200) を担持したカラ ムを用い、トルエンを展開溶媒として精製したところ、 8. 4gの4,4'-ビス(1-ナフチルアミノ)-p -ターフェニレンが得られた。このうちの5gと4-3 ードトリフェニルアミン15g、炭酸カリウム20g、 銅粉末1gおよびニトロベンゼン100mlを300m 1の三つ口フラスコ中に入れ、200℃で60時間加熱 した。反応後、無機物を濾別し、母液の溶媒を留去し た。その残渣をシリカゲル (広島和光 (株) 社製 C-200)を担持したカラムを用い、トルエン/ヘキサン =1/2を展開溶媒として精製した。さらにこれを0. 01mmHgの真空下で昇華精製し、0.8gの淡黄色 粉末を得た。FD-MSを測定した結果、C74H54 20 N4=998に対し、999 (M+1) と499 (I/ 2M) のピークが得られたので、PD-01と同定し た。

【0155】〔実施例2〕

 $\langle PD-02$ の合成 $\rangle 9,10-ジアミノフェニルアン$ トラセン(和歌山精化工業(株)社製)10g、1-ヨ ードナフタレン(広島和光(株)社製)20g、炭酸カ リウム20g、銅粉末1gおよびニトロベンゼン100 mlを300mlの三つ口フラスコ中に入れ、200℃ で48時間加熱攪拌を行なった。反応後、無機物を濾別 30 し、母液の溶媒を留去した。その残渣をシリカゲル(広 島和光(株)社製 C-200)を担持したカラムを用 い、トルエンを展開溶媒として精製したところ、7.7 gの9,10-ビス(1-ナフチルアミノフェニル)ア ントラセンが得られた。このうちの5gと4-ヨードト リフェニルアミン15g、炭酸カリウム20g、銅粉末 1gおよびニトロベンゼン100mlを300mlの三 つ口フラスコ中に入れ、200℃で60時間加熱した。 反応後、無機物を濾別し、母液の溶媒を留去した。その 残渣をシリカゲル(広島和光社製 C-200)を担持 したカラムを用い、トルエン/ヘキサン=1/2を展開 溶媒として精製した。さらに、これを0.01mmHg の真空下で昇華精製し、0.8gの淡黄色粉末を得た。 FD-MSを測定した結果、C82H58N4=109 8に対し、1099 (M+1) と549 (1/2M) の ピークが得られたので、PD-02と同定した。

【0156】〔実施例3〕

〈PD-03の合成〉4,4'-ジアミノジフェニルメタン(広島和光(株)社製)10g、1-ヨードナフタレン(広島和光(株)社製)20g、炭酸カリウム20 50

g、銅粉末1gおよび二トロベンゼン100mlを300mlの三つロフラスコ中に入れ、200℃で48時間加熱攪拌を行なった。反応後、無機物を濾別し、母液の溶媒を留去した。その残渣をシリカゲル(広島和光

(株) 社製 C-200)を担持したカラムを用い、トルエンを展開溶媒として精製したところ、9.6gのビス(4-(ナフチルー1-イル) アミノフェニル) メタンが得られた。このうちの5gと4-ヨードトリフェニルアミン15g、炭酸カリウム20g、銅粉末1gおよ10 びニトロペンゼン100mlを300mlの三つロフラスコ中に入れ、200℃で60時間加熱した。反応後、無機物を濾別し、母液の溶媒を留去した。その残渣をシリカゲル(広島和光社製 C-200)を担持したカラムを用い、トルエン/ヘキサン=1/2を展開溶媒として精製した。さらにこれを0.01mmHgの真空下で昇華精製し、1.2gの淡黄色粉末を得た。FD-MSを測定した結果、C69H52N4=936に対し、937(M+1)と468(1/2M)のピークが得られたので、PD-03と同定した。

【0157】〔実施例4〕

〈PD-04の合成〉4,4'ージアミノジフェニルエ ーテル(広島和光(株)社製)10g、1-ヨードナフ タレン(広島和光(株)社製)20g、炭酸カリウム2 0g、銅粉末1gおよびニトロベンゼン100mlを3 00mlの三つロフラスコ中に入れ、200℃で48時 間加熱攪拌を行なった。反応後、無機物を濾別し、母液 の溶媒を留去した。その残渣をシリカゲル(広島和光 (株) 社製 C-200) を担持したカラムを用い、ト ルエンを展開溶媒として精製したところ、9.2gのビ ス(4-(ナフチル-1-イル)アミノフェニル)エー テルが得られた。このうちの5gと4-ヨードトリフェ ニルアミン15g、炭酸カリウム20g、銅粉末1gお よびニトロペンゼン100mlを300mlの三つロフ ラスコ中に入れ、200℃で60時間加熱した。反応 後、無機物を濾別し、母液の溶媒を留去した。その残渣 をシリカゲル(広島和光社製 C-200)を担持した カラムを用い、トルエン/ヘキサン=1/2を展開溶媒 として精製した。さらにこれを 0. 01 mm H g の真空 下で昇華精製し、1.0gの淡黄色粉末を得た。FD-MSを測定した結果、C68H50N4O=938に対 し、939 (M+1) と469 (I/2M) のピークが 得られたので、PD-04と同定した。

【0158】〔実施例5〕

(N-(1-ナフチル)-4-ヨードジフェニルアミンの合成) N-フェニル-N-(1-ナフチル) アミン(広島和光(株)社製)10g、p-フルオロニトロベンゼン(広島和光(株)社製)20g、炭酸カリウム20g、銅粉末1gおよびニトロベンゼン100mlを300mlの三つロフラスコ中に入れ、200℃で48時間加熱攪拌を行なった。反応後、無機物を濾別し、母液

100

の溶媒を留去した。その残渣をシリカゲル(広島和光 (株) 社製 C-200) を担持したカラムを用い、ト ルエンを展開溶媒として精製したところ、9.0gのN ーナフチルー4-ニトロージフェニルアミンが得られ た。これをオートクレープ中に入れ、DMF100m 1、5%Pd/C 5gを加え、水素を5Kg/cm² チャージして攪拌した。触媒を濾別し、飽和食塩水30 0ml中に注入し、析出した結晶を濾取した。これをト ルエンで再結晶し、6.4gのN-ナフチル-4-アミ ノージフェニルアミンが得られた。次に濃硫酸20ml を15℃に冷却し、亜硝酸ナトリウム3gを30℃以下 で加え、溶解した後、酢酸100m1を加えた。これに 氷冷下で5.0gのN-ナフチル-4-アミノージフェ ニルを加え、室温で1時間攪拌した。別によう化カリウ ム10gを70℃の水に溶かし、ここへ上述した反応物 を添加した。70℃で30分攪拌した後、11の水に注 入し、不溶物を濾別した。これをシリカゲル(広島和光 (株) 社製C-200) を担持したカラムを用い、トル エンを展開溶媒として精製し、2.7gのN-(1-ナ フチル) - 4 - ヨードジフェニルアミンを得た。

【0159】〈PD-05の合成〉実施例2で合成した 9,10-ピス (1-ナフチルアミノフェニル)アントラセン1gとN- (1-ナフチル) -4-ヨードジフェニルアミン2g、炭酸カリウム5g、銅粉末1gおよびニトロベンゼン100mlを300mlの三つロフラスコ中に入れ、200℃で60時間加熱した。反応後、無機物を濾別し、母液の溶媒を留去した。その残渣をシリカゲル(広島和光社製 C-200)を担持したカラムを用い、トルエン/ヘキサン=1/2を展開溶媒として精製した。さらにこれを0.01mmHgの真空下で昇 30 華精製し、0.3gの淡黄色粉末を得た。FD-MSを測定した結果、C90H62N4=1198に対し、1199(M+1)と599(1/2M)のピークが得られたので、PD-05と同定した。

【0160】〔実施例6〕

【0161】〈STBA-1の合成〉N, N'ージフェニルー4, 4'ーベンジジン(東京化成社製)1g、4ーヨード3'ーメチルトリフェニルアミン3g、炭酸カリウム5g、銅粉末1gおよびニトロベンゼン100mlを300mlの三つロフラスコ中に入れ、200℃で60時間加熱攪拌を行なった。反応後、無機物を濾別し、母液の溶媒を留去した。その残渣をシリカゲル(広島和光(株)社製 C-200)を担持したカラムを用い、トルエン/ヘキサン=1/2を展開溶媒として精製した。さらにこれを0.01mmHgの真空下で昇華精50

製し、0.2gの淡黄色粉末を得た。FD-MSを測定した結果、C60H46N4=822に対し、823(M+1)と411(1/2M)のピークが得られたので、STBA-1と同定した。STBA-1の蛍光スペクトルを図1に示す。

【0162】〔実施例7〕

〈4-ヨード-4'-ニトロピフェニルの合成〉ピフェ ニル (広島和光社製) 1500g、オルト過よう素酸 (広島和光社製) 444g、よう素987g、酢酸5. 1 kg、硫酸147mlおよび水975gを101コル ベンに入れ、70℃で2時間加熱攪拌を行なった。反応 後、1.3kgの水を加え、析出した結晶を濾取した。 これを5.5 kgのエタノールで再結晶し、2010g の結晶を得た。これを酢酸14kg中に溶解し、発煙硝 酸1.81を80℃にて滴下し、8時間攪拌した。室温 まで冷却した後、9.5kgのメタノールを加え、析出 した結晶を濾取し、27kgのトルエンで再結晶し、5 80gの4-ヨード-4'-ニトロピフェニルを得た。 【0163】〈PT-01の合成〉ジフェニルアミン (広島和光社製) 2 kg、4-ヨード-4'-ニトロビ フェニルを500g、無水炭酸カリウム500g、銅粉 末20gおよびニトロベンゼン21を101のコルベン に入れ、200℃で15時間加熱攪拌した。反応後、無 機物を濾別し、母液の溶媒を留去した。その残渣をシリ カゲル(広島和光社製 C-200)を担持したカラム を用い、トルエンを展開溶媒として精製し、340gの 結晶を得た。これをDMF71に溶解し、5%Pd/C 30gとともに101のオートクレーブに入れ、水素を 25kg/cm²にチャージして50℃に昇温し、10 ~25 kg/cm²に保ち8時間攪拌した。触媒を濾去 し、濾液を水に投入し、析出物を濾取した。これをトル エン401にて再結晶し、283gの結晶を得た。この 250gと、p-フルオロニトロベンゼン(広島和光社 製) 280g、無水炭酸カリウム500g、銅粉末10 gおよびニトロベンゼン11を51のコルベンに入れ、 200℃で32時間加熱攪拌した。

【0164】反応後、無機物を濾別し、母液の溶媒を留去した。その残渣をシリカゲル(広島和光社製 C-200)を担持したカラムを用い、トルエンを展開溶媒として精製し、194gの結晶を得た。これをDMF41に溶解し、5%Pd/C30gとともに51のオートクレープに入れ、水素を25kg/cm²にチャージして50℃に昇温し、10~25kg/cm²に保ち8時間攪拌した。触媒を濾去し、濾液を水に投入し、析出物を濾取した。これをトルエン201にて再結晶し、128gの結晶を得た。この100gと、ヨードベンゼン(広島和光社製)200g、無水炭酸カリウム250g、銅粉末5gおよび二トロベンゼン11を51のコルベンに入れ、200℃で48時間加熱攪拌した。反応後、無機物を濾別し、母液の溶媒を留去した。その残渣をシリカ

101

ゲル (広島和光社製 C-200) を担持したカラムを 用い、トルエン/ヘキサン=1/2を展開溶媒として精 製した。さらにこれを 0. 01 mm Hgの真空下で昇華 精製し、23gの淡黄色粉末を得た。FD-MSを測定 した結果、C60H46N4=822に対し、823 (M+1) と411 (1/2M) のピークが得られたの で、PT-01と同定した。

【0165】 (実施例8) 前述したPD-1を用いて有 機EL素子を作製した。すなわち、まず、ガラスに被膜 されたインジウム・スズ酸化物の透明性アノードを設け 10 た。インジウム・スズ酸化物は約750オングストロー ムの厚さであり、ガラスは(25mm×75mm×1. 1 mm) のサイズであった。これを真空蒸着装置(日本 真空技術(株)社製)に入れて、約10-⁶torrに 減圧した。これにPD-01を600オングストローム の厚さで蒸着した。この際の蒸着速度は2オングストロ ーム/秒であった。次にNPDを200オングストロー ムの厚さで蒸着した。この際の蒸着速度は2オングスト ローム/秒であった。次に発光材であるDPVTP(下 記化学式91参照) および電子注入補助材であるDPA

VBi (下記化学式92参照) とを同時蒸着して400 オングストロームの厚さの発光層を形成した。この際の DPVTPの蒸着速度は50オングストローム/秒であ り、DPAVBiの蒸着速度は1オングストローム/秒 であった。さらにAlgを蒸着速度2オングストローム / 秒で蒸着した。最後にアルミニウムとリチウムとを同 時蒸着することにより、陰極を2000オングストロー ムの厚さで形成した。この際のアルミニウムの蒸着速度 は10オングストローム/秒であり、リチウムの蒸着速 度は0. 1オングストローム/秒であった。

[0166]

【化91】

DPVTP

[0167]

【化92】

20

DPAVBi

40

【0168】得られた素子を1000nitで発光させ た時の駆動電圧は6.2 Vだった。また100時間定電 流駆動後の電圧上昇は0.4 V、1000時間後の駆動 電圧上昇は0.6V、半減寿命は600時間であった。 なお、DPVTPのイオン化エネルギーは5.9eV、 DPAVBiのイオン化エネルギーは5.5eVであ

【0169】 〔実施例9〕 実施例8においてPD-01 の代わりにPD-02を用いた以外は同様にして有機E L素子を作製した。得られた素子を1000nitで発 光させた時の駆動電圧は6.0Vだった。また100時 間定電流駆動後の電圧上昇は0.5 V、1000時間後 の駆動電圧上昇は0.7V、半減寿命は2000時間で あった。

【0170】 (実施例10) 実施例8においてPD-0 1の代わりにPD-03を用いた以外は同様にして有機 EL素子を作製した。得られた素子を1000nitで 発光させた時の駆動電圧は6.3Vだった。また100 時間定電流駆動後の電圧上昇は0.4V、1000時間 後の駆動電圧上昇は0.6 Vであった。

【0171】 (実施例11) 実施例8においてPD-0 1の代わりにPD-04を用いた以外は同様にして有機 EL素子を作製した。得られた素子を1000nitで 発光させた時の駆動電圧は6.2Vだった。また100 時間定電流駆動後の電圧上昇は0. 4 V、1000時間 後の駆動電圧上昇は0.7 Vであった。

【0172】〔実施例12〕実施例8においてPD-0 1の代わりにPD-06を用いた以外は同様にして有機 EL素子を作製した。得られた素子を1000nitで 発光させた時の駆動電圧は6.1Vだった。また100 時間定電流駆動後の電圧上昇は0.5V、1000時間 後の駆動電圧上昇は0.6 V、半減寿命は2100時間 と良好であった。

【0173】 〔実施例13〕 実施例8においてPD-0 1の代わりにSTBA-1を用いた以外は同様にして有 機EL素子を作製した。得られた素子を1000nit で発光させた時の駆動電圧は6.1Vだった。また10 0時間定電流駆動後の電圧上昇は0.4V、1000時 間後の駆動電圧上昇は0.6 V、半減寿命は1200時 間であった。このように、本発明の化合物(III)は、 特に駆動電圧が低い上に、電圧上昇も小さく、半減寿命 も長かった。この結果は、本発明の化合物(III)が、 STBA-1に比べて、上記のような優れた特徴を有す ることを示している。

【0174】〔実施例14〕 ITOをコートしたガラス 基板(旭硝子社製15Ω/□ 1500オングストロー ム)を25mm×25mmに切り取り、ITO面側の中 50 央にScotch社製のクリアテープ (幅12mm) を

気泡が入らないように貼り、これを腐食液に浸漬してパ ターン形成を行なった。これを真空蒸着装置(日本真空 技術(株)社製)に入れて、約10-6 torrに減圧 した。これにSTBA-1を500オングストロームの 厚さで蒸着した。この際の蒸着速度は2オングストロー ム/秒であった。次にAlqを蒸着速度2オングストロ ーム/秒で500オングストローム蒸着した。最後にマ グネシウムと銀とを同時蒸着することにより、陰極を2 000オングストロームの厚さで形成した。この際のマ グネシウムの蒸着速度は10オングストローム/秒であ 10 り、銀の蒸着速度は1オングストローム/秒であった。 さらに酸化保護膜として銀を1000オングストローム 蒸着積層した。電極面積は5mm×5mmであった。得 られた素子を100nitで発光させた時の駆動電圧は 4.8 Vだった。また100時間定電流駆動後の電圧上 昇は0.8 V、1000時間後の駆動電圧上昇は1.3 Vであった。

【0175】 [実施例15] 実施例8においてPD-0 1の代わりにPT-01を用いた以外は同様にして有機 EL素子を作製した。得られた素子を1000nitで 20 発光させた時の駆動電圧は6.2 Vだった。また100 時間定電流駆動後の電圧上昇は0.3 V、1000時間 後の駆動電圧上昇は0.5 Vであった。

【0176】〔実施例16〕実施例8と同様に有機EL 素子を作製した。但し、PD-01の代わりにSTBA -1を用い、青色発光材料として、DPVTPの代わり に国際特許公報WO98/30071 (1998年7月 9日公開)号公報に開示されている下記化学式93に示 されたDPA2を用いた。また、電荷注入補助材とし て、DPAVBiを添加した。この場合、1000ni tで発光させた時の駆動電圧は、6.3Vであった。ま た100時間定電流駆動後の電圧上昇は0.4V、10 00時間後の駆動電圧上昇は0.7Vであり、半減寿命 は1200時間であった。電荷注入補助材DPAVBi が添加されていない後述する比較例4における有機EL 素子と本実施例の有機EL素子とを比較したところ、本 実施例の有機EL素子は発光材に電荷注入補助材を添加 し、かつ一般式(I)で表される化合物を正孔輸送帯域 に用いているため、低電圧で駆動しながら定電流駆動後 の電圧上昇も低減でき、さらに寿命も長いという特性が 40 得られた。

【0177】 【化93】 104

DPA2

【0178】〔実施例17〕本実施例は、発光材としての使用例であり、インジウム・スズ酸化物で被覆されたガラス上にPD-05′を800オングストロームの厚さで蒸着した。次にアルミニウムとリチウムとを同時蒸着し、リチウムを3wt%含有するアルミニウム・リチウム合金製の陰極を形成した。このようにして得られた発光素子に6.0Vの電圧を印加したところ、400nitの発光輝度が得られた。また、半減寿命は300時間であった。

【0179】 [実施例18] 実施例17におけるPD-05′の代わりにPD-35′を用いた以外はすべて同様にして、発光素子を作製した。得られた発光素子に5.5 Vの電圧を印加したところ、400nitの発光輝度が得られ、半減寿命は340時間であった。

【0180】〔実施例19〕実施例17におけるPD-05′の代わりにPD-36′を用いた以外はすべて同様にして、発光素子を作製した。得られた発光素子に7.0Vの電圧を印加したところ、350nitの発光輝度が得られ、半減寿命は250時間であった。

【0181】〔実施例20〕実施例17におけるPD-30 05′の代わりにPD-38′を用いた以外はすべて同様にして、発光素子を作製した。得られた発光素子に6.2 Vの電圧を印加したところ、280 nitの発光輝度が得られ、半減寿命は400時間であった。

【0182】〔実施例21〕実施例17におけるPD-05′の代わりにPD-44′を用いた以外はすべて同様にして、発光素子を作製した。得られた発光素子に8.0 Vの電圧を印加したところ、440nitの発光輝度が得られ、半減寿命は460時間であった。

【0183】〔実施例22〕実施例17におけるPD-05′の代わりにPD-49′を用いた以外はすべて同様にして、発光素子を作製した。得られた発光素子に4.7Vの電圧を印加したところ、380nitの発光輝度が得られ、半減寿命は340時間であった。

【0184】〔実施例23〕実施例17におけるPD-05′の代わりにPD-54′を用いた以外はすべて同様にして、発光素子を作製した。得られた発光素子に6.2 Vの電圧を印加したところ、250 n i t の発光輝度が得られ、半減寿命は280時間であった。

【0185】〔実施例24〕実施例17におけるPD-50 05′の代わりにPT-01′を用いた以外はすべて同 様にして、発光素子を作製した。得られた発光素子に 5.3 Vの電圧を印加したところ、450nitの発光 輝度が得られ、半減寿命は400時間であった。

105

【0186】 [実施例25] 実施例17におけるPD-05′の代わりにPT-04′を用いた以外はすべて同様にして、有機EL素子を作製した。得られた発光素子に5. 6 Vの電圧を印加したところ、280 n i t の発光輝度が得られ、半減寿命は320時間であった。

【0187】〔実施例26〕実施例17におけるPD-05′の代わりにPT-08′を用いた以外はすべて同 10様にして、有機EL素子を作製した。得られた発光素子に4.8 Vの電圧を印加したところ、340nitの発光輝度が得られ、半減寿命は250時間であった。

【0188】 [実施例27] 実施例17におけるPD-05′の代わりにPT-10′を用いた以外はすべて同様にして、有機EL素子を作製した。得られた発光素子に5. 7 Vの電圧を印加したところ、300 n i t の発光輝度が得られ、半減寿命は280時間であった。

【0189】 [実施例28] 実施例17におけるPD-05′の代わりにPT-25′を用いた以外はすべて同様にして、有機EL素子を作製した。得られた発光素子に6. 2 Vの電圧を印加したところ、320 n i t の発光輝度が得られ、半減寿命は360時間であった。

【0190】 〔比較例1〕実施例8におけるPD-01 の代わりに、下記化学式94で示されるNPDATAを用いた以外は同様にして有機EL素子を作製した。得られた素子を1000 n i t で発光させた時の駆動電圧は8.4 Vであった。また100時間定電流駆動後の電圧上昇は0.5 V、1000時間後の駆動電圧上昇は0.7 Vであった。

[0191]

NPDATA

【0192】〔比較例2〕実施例8におけるPD-01の代わりにNPDを用いた以外は同様にして有機EL素子を作製した。得られた素子を1000nitで発光させた時の駆動電圧は11.8Vであった。また100時間定電流駆動後の電圧上昇は1.4V、1000時間後の駆動電圧上昇は3.8Vであった。

【0193】 [比較例3] 実施例8におけるPD-01 50 で表される化合物には電子注入に対して耐性が認められ

の代わりに、下記化学式 95で示されるHI-01を用いた以外は同様にして有機 EL 素子を作製した。得られた素子を100 nit で発光させた時の駆動電圧は 8.1 Vであった。また 100 時間 定電流駆動後の電圧上昇は 0.5 V、1000 時間後の駆動電圧上昇は 0.8 Vであった。

[0194]

【化95】

HI-01

【0195】 〔比較例4〕実施例16と同様に有機EL素子を作製した。但し、電荷注入補助材DPAVBiは添加されていない。この場合、得られた素子を10000 nitで発光させた時の駆動電圧は7.0Vだった。また100時間定電流駆動後の電圧上昇は1.2V、100時間後の駆動電圧上昇は2.0Vであった。このときの半減寿命は、800時間であった。

【0196】〔比較例5〕実施例17におけるPD-05′の代わりにSTBA-1を用いた以外は同様にして発光素子を作製した。得られた発光素子に9.4 Vの電圧を印加したところ、170 nit の発光輝度が得られ、半減寿命は20時間であった。

【0197】上記の〔比較例5〕の発光素子で得られた 結果と、〔実施例18〕~〔実施例23〕の発光素子で 得られた結果との比較から、STBA-1を用いた場合 には発光材としては寿命がきわめて短いことがわかっ た。これは、STBA-1に電子が注入された際に、材 料が劣化するためである。しかし、本願発明の一般式 (III) で表される化合物は、半減寿命間長く、電子注 入に対して劣化しにくいことがわかった。従って、正孔 輸送帯域であっても電子は少量ではあるが注入されるの で、電子注入に対する耐性を有する一般式(III)で表 される化合物を正孔輸送帯域に用いることが好ましい。 【0198】 [比較例6] 実施例17におけるPD-0 5′の代わりにPT-01を用いた以外は同様にして発 光素子を作製した。得られた発光素子に8.9 Vの電圧 を印加したところ、120nitの発光輝度が得られ、 半減寿命は30時間であった。

【0199】上記の〔比較例6〕における発光素子で得られた結果と〔実施例24〕~〔実施例28〕における発光素子で得られた結果との比較から、PT-01で示される化合物は、電子注入に対する耐性が認められないが、PT-01以外の一般式(IV)および一般式(V)で表される化合物には電子注入に対して耐性が認められ

た。ただし、PT-01を前記実施形態のように正孔輸送帯域に用いる場合には、電子注入量が小さく劣化もほとんど無いため問題にならない場合もあるが、さらに、電子注入耐性の高い一般式(III)、(IV)および(V)で表される化合物を用いれば、発光素子自体の寿命を長くすることができる。

【0200】以上の結果から判るように、本発明の化合物を正孔輸送帯域に用いることにより、同じ輝度の発光を得るのに必要な電圧が著しく低減する長寿命の有機E L素子の作製が実現できた。また不純物が入らないよう 10 に精製した結果、駆動における電圧上昇もきわめて小さくなった。 [0201]

【発明の効果】以上に述べたように、本発明によれば、イオン化ポテンシャルが小さくかつ正孔移動度が大きいフェニレンジアミン誘導体が得られる。また、このフェニレンジアミン誘導体を、一対の電極間の有機発光層内の正孔輸送層に含有するとともに、電荷注入補助材を添加しながら有機EL素子の有機発光層を形成することで、駆動電圧の低減と素子の長寿命化が実現できる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明のフェニレンジアミン誘導体STBA-1の蛍光スペクトルを示す線図である。

【図1】

